

橄欖のそよぎ

片山敏彦著作集 第四卷

片山敏彦著作集 4

© 1971 Misuzu Shobo

1971年10月20日 第1刷発行

¥ 900.

著 者 かた やま とし ひこ
 片 山 敏 彦

 東京都文京区本郷3丁目17-15
発 行 者 北 野 民 夫

 東京都新宿区改代町24
印 刷 者 田 中 昭 三

発行所 東京都文京区 株式 み す ず 書 房
 本郷3丁目17 会社 電 話 814-0131(代)
 郵便番号 113 振替東京 195132

(第1回配本)

理想社印刷・鈴木製本

目次

I

文学と象徴・	7
詩心について・	55
詩と生活・	62
短章	
樹間のアポロ像・	68
詩の探求・	72
詩人の再建・	74
ウィリアム・ブレイク覚書・	76

詩と神秘精神・・・・・・・・・・・・・・・・・8

II

ボードレールとユーゴー・・・・・・・・・・・・・・111

宿命と雅愛・・・・・・・・・・・・・・・・・131

アンドレ・スピール・・・・・・・・・・・・・・140

理性と夢——アンドレ・シュアレス論・・・・・・・・148

ポール・クロードルの詩魂・・・・・・・・・・・・159

フランドルの詩人の姿に・・・・・・・・・・・・164

ヴェルハーランの危機・・・・・・・・・・・・・・168

ヴィドラックへの手紙・・・・・・・・・・・・・・189

マルセル・マルチネ論・・・・・・・・・・・・・・196

III

友愛の詩人——ウォルト・ホイットマンのこと	223
詩と思索	232
ガブリエラ・ミストラル	241
橄欖のそよぎ——詩人ブルックのこと	257
タゴール論	277
解説	293
村上光彦	

I

文学と象徴

1

十九世紀の末葉に、フランスの文壇で象徴派（ル・サンボリズム）が抬頭したのは、当時の文学の主流をなしていた自然主義への一つの反動としてだった。「つねに同じように陰気な、凄まじいことばかりを描く自然主義者たち」の作品に倦んだ若い人々が、マラルメやヴェルレーヌの文学に惹きつけられるようになったのである。

象徴派の人々は内面的な夢の領土を開放した。しかし当時のフランスの現実には、美しい夢の反映を、文学がそこに見いだすのに適した現実であつたであろうか？ いなむしろそれは、いわゆる世紀末的な空気の濃い重苦しい時代であつた。自然科学的世界観を形而上的立場にまで高めた結果、人々は息づまる物質主義の雰囲気をかもし出していた。フランスはまた普仏戦争の敗北による一般的な意気沮喪にも襲われていた。

当時のドイツはどうだったか？ そこには「季節」の中に真の偉大さの証左を探しても探しても認め得ず、「文化俗人」の觀念を生み出してそれと戦っている若いニーチェ、ショーペンハウアーとヴァーグナーとの中の中にのみ自国の文化甦生の希望をつないでいるニーチェが、あの運命的な孤独と病氣との中で、生きた思想を産み出していた。

フランスの象徴派は、夢と音楽とへの探求を企てたが彼らの声には苦味が交っていた。彼らは「内的なうごき」を求めたゆえに、パルナシアンの、動かぬ嵐を描くような外面的壮麗さに対して一種のストイシズムを対立させた。マラルメは、とうていフランス語に翻訳することの不可能なような英詩の翻訳をつづけることによって、自国の文学言語の密度を、異常に高めることに専念していた。その密度を通じて、夢が理念に転身する秘密な経過を彼は見まもっていた。

ジョルジュ・デュアメルが書いている——「前世紀に生き、そして英雄であつた人々の名をいくつか挙げよ、と言われるなら、私はまずステファーン・マラルメの名を挙げるだろう。彼は生来、多数の人をいちどきに征服するたちの人ではなかった。公共の広場で語って効果を得るにはあまりにもくすんだ精緻な声をもっていた。彼はまず自己を自己に証明することを望んだ。……マラルメは、地上に存在しており地上において一個の人間であるというこの事実を、自己自身に向かつて正当づけるために詩を書いた。ステファーン・マラルメによって低い声で言われたことがらが、不思議な、透徹的な、永遠性の薫りをもっていたために、彼は彼の声を聴こうとする人々のグループを、身の周りに集める結果となつた……」マラルメがおのずから教えたことは何だつたらうか？

デュアメルは言う、それは空虚浅薄な表層に心を許さず「もつとも遙かな、もつとも深い意味」をつかもうとする頑強な努力である。「このゆえにマラルメは、象徴派と名づけられたあの大きい運動の師であり、先祖である。そしてこの運動は文学史の中に、文学形式の或る展開を跡づけたばかりではなしに、さらに、そしてなかならず或る考えかたの出現を印したのである……」

或る考えかたの出現——象徴精神的に、内形象およびそれら形象相互の照応と呼応によって、もつとも遙かな意味に到ろうとするような考えかたの出現、これこそマラルメの仕事においても重要なことではなかったろうか？ マラルメが静かな努力と、その努力の稀有の密度とから発した影響の射程は、長くもあるしまた複雑多様でもあるように見える。この影響は精妙な仕方によって、人の内的視野を変えつつその人々の魂を変えた。

マラルメは彼の象徴主義を通じて、夢を理念に転身させる内的アトリエの工人であり、そして工人であることによって哲人であった。「低声で永遠のことばを語るこの哲人」とデュアメルも言っている。

それゆえにフランス文学史上で、象徴派の運動が力を喪^{うしな}ったのちも、マラルメ的な感じかた観かた考えかたの影響は、ただに文学の領域だけにとどまらなかった。それはまたフランス以外の国にも影響したが、ドイツの詩人シュテファン・ゲオルゲもマラルメの精神風土から、抜きがたい刺激を受け取った一人であった。人間的・性格的に言えば、この二人の詩人ははなはだ相異なる点を多分に持っているのだが。

そしてアンリ・ド・レニエの次の詩は、当時の象徴派の森のこだまを、今も静朗な余韻のようにわれわれの心に浮び上がらせる――

Un petit roseau m'a suffi

Pour faire frémir l'herbe haute

Et tout le pré

Et les doux saules

Et le ruisseau qui chante aussi ;

Un petit roseau m'a suffi

A faire chanter la forêt.

丈高き草を

草はらの全体を

そして 優しい柳の樹々を

そして 歌うせせらぎを――

これらみんなを顫わせるには

小さな蘆の笛だけで わたしにはこと足りた。

森を歌わせるには

小さな蘆の笛だけで わたしにはこと足りた。

リルケは「星」を

一本の光の筋の 向うの端の白い都

と表現したことがあった。この形象性から異様な深い感銘を私は受けた。そして詩的形象の暗喩表現が、生活全体へ与えるような影響力をもっていることを感じさせられた。

アランが『文学語録』の第八章に、暗喩表現について、忘れがたいことを述べている。アランによると、暗喩表現は本来宗教的性質のもので、「われわれ人間の思想と感情とに支柱を与える」ものである。そういう暗喩表現が求める「真」は、推理知性で破ることのできないような秩序である。「比喩表現の目的は、人間の思想に律度を与え、いわば人間の思想を、客観的具体世界の歩調で前進させることにあるのだ。詩人の力はその点にある。」——「厳格なキリスト教徒のボッシュエでさえも、彼の説教文をつくるとき、リバノン山の香柏樹という自然物による表現を悦んで用いたが、ここでも必然にまたしても自然が勝ったわけである。——ボッシュエはこの樹を、枝から枝へと叙述して、遂に鳥の巢のことまで語っている。そしてここで注目すべきことは、この聖書の中の自然的形象が、まことの

祈りの調子を感じ銘させることである。」

このアランの言葉は、まるでエッカーマンの『ゲーテとの対話』を読んでいるときのような印象を与える。なぜだろうか？ それは自然への信頼と、自然に即する象徴の道が、宇宙感情をつたわって宗教的感情に入り込むという考えにおいてアランとゲーテとが一致しているためである。

ゲーテこそ最大の象徴家であったが、彼の象徴主義的態度と彼の存在論的態度とは不可分であった。ゲーテは言った——「われわれが高い意味で発明とか発見とか呼ぶ一切事は、或る独創的な真理感 (Wahrheitsgefühl) の意義深き実行および確立であつて、この真理感は、永らく人知れず育まれたのち突如と電光の速さで一つの実り多き認識となつて現われる。それは内部から発して外部において展開する啓示である。これこそ人間に神との似通いを予感させるものである。それは世界と精神との一綜合であり、存在の永遠の調和についてきわめて幸福な確証を与えるものである。」

このような考えに立つとき、存在に対する精神の態度において、直観がきわめて大切なものとされることは自然であり当然である。育まれた真理感情からの直観、ゲーテはこれを重んじた。それゆえに彼は「直接的な思索」とか「特色ある観相」とか「すべて事実的なものは、それがすでに理論である」とか言った。スピノーザの知的愛にゲーテが引きつけられたのも当然であった。そこからゲーテの文学的態度は象徴主義的になった。彼は具体的・現象的自然の中に「神の指の痕」を探した。もつとも個性的なものと原型的なものとの本質的一致を信じた。そして時間を含むメタモルフォーゼの思想に立つことによって、スピノーザ的静止の宇宙をうごくものとした。より高いものへの無限の発展

の可能性を感じることによってゲーテは、人間がその準備であるような「より高い存在」のヴィジョンをしばしば心の中に視た。

霊的進化説ともいべきゲーテのこのヴィジョンはニーチェの『ツァラトゥストラ』の先覚となつた。

象徴的形象は芸術家の心にひらめいて来る。心が形象に襲いかかられるかのである。エンガーディンの山上で或る日そんなふうにしてツァラトゥストラの形姿はニーチェの心に襲いかかつて来た。その形姿は、ニーチェの思想と欣求と、究理と音楽と、追憶と予感とを併せたもののシンボルたる意味を持っていた。思想の精髓がかたちとなって襲つて来たのである。この形姿の襲来は、ニーチェの生涯中の最大な出来事だった。その瞬間、山の静寂の中でニーチェは感動のあまりはげしく泣いた。象徴をとらえたために、いな、象徴につかまれたために、この哲学者は泣いたのである。それも無理はなかった。この形姿の誕生は全人類的に意味のふかい事実だったのだから。ニーチェは書いている——「……人の心底を震駭させ覆すような或るものが、言うばかりなき確かさと靈妙さともって突然、見得るものとなり聴き得るものとなる、という意味での啓示の概念は、あの事実を端的に言い現わすものである。そのとき人は聴こうと求めずして聴き、誰から与えられるかを問わずして受ける。稲妻のように一つの思念がきらめき明るむ——ためらいの無い形を採って必然的に。私は少しもみずから選択したのではなかった。万事は最高度にのっぴきならぬように生起した。しかも自由感の、絶

対感の、力の、神々しさの嵐に吹かれているかのようだった。その形象の動かしがたい必然性こそ、
 つとも注目に値するものだ。形象とは何か、比喩とは何か、ということさえもはや念頭にない。いっ
 さいは、もつとも直接的な、もつとも正しい、もつとも簡明な表現として与えられるのである。ニー
 チェはこの未曾有の体験の中に、「言語が、形象性たるの本質へ帰還する」ときの、おどろくべき圧
 倒力を『この人を見よ』の中に描いている。また『ツァラトゥストラ』の中には――
 「ここにおいてはあらゆるものが、愛撫しつつ汝の言語へと来り、汝に親愛の情を示す。それは、
 あらゆるものが汝の背中に騎^のって駆^はることを望むためである。ここにおいては、汝はあらゆる比喩に
 騎^のってあらゆる真理へ行く。」

ところで『この人を見よ』というあの本を読んで私がもつとも驚くことは、半ば常人の頭脳のはた
 らきをすでに失っている著者のあの本に、表面に現われている意味や自意識の誇示とは別に、形容し
 がたく高貴な、静朗な音楽的（または色調的）統一が、少しも乱れずに一貫して流れていることであ
 る。ドストイェフスキーのもつとも深刻な描写が、ただ暗い深刻さの印象を残すのではないように、
 ニーチェの『この人を見よ』も、ただ個人的自意識の印象を与えるのではない。真の象徴性を通じて
 原型的なものを指している作品は、どこかに究極的調和の鐘が反響している。語っているのはニーチ
 ェという「彼」だけではない。もつと普遍的な「彼」である。ヘルマン・ヘッセは歌った――

「永遠に生きるのは、『我』でなく『汝』でない。ただ『彼』のみが永遠である。」